

沢村貞子著「私の浅草」暮らしの手帖社 1996年10月4日刊を読む

浴衣

1. このあいだ、仕事がえりの車の中から、娘さんの浴衣姿をチラと見かけた。
2. 何本もの紐で、身体をしめつけるきゅうくつさに、和服はいや……というこのごろのお嬢さんも、夏だけは浴衣を……とおもうのだろう。白地に大きなトンボをあしらった柄がよく似合っていた。黄色い無地の半巾帯も可愛らしかった。
3. ただ——衿元からのぞいていた、ピンクの半衿がちょっと気にかかった。浴衣は素肌に着るものである。レースに裏打ちするような野暮ったさは避けたい。下着を着るなら、せいぜい晒さらしの肌じゅばん。それもからだにぴったりした衿なしがいい。
4. 白足袋たびも草履もいただけない。素足に下駄が、見た眼にも涼しげである。柄の好みもよく、スタイルもいい娘さんだけに、惜しいな、と思った。
5. 昔、下町の夕涼みには、男の人たちもみんな、競うように、おもいおもいの浴衣を着たものだった。
6. 縞や格子、吉原つなぎなど、おかみさんや母親が、ひと晩で仕立てあげたものである。私の父なども、柄のちがった粋な手拭 13 本を縫いあわせた自家製の<手拭ゆかた>が気に入っていた。縫いあがると、こどものようにご機嫌になったものだった。裏の庭でサッと行水をあびたあと、それをひっかけてプイと出て行ったその長身のうしろ姿が、いまでも思い出される。
7. 「七五三、五分ごぶまし」という言葉を母から教えられたのもその頃である。つまり、男の浴衣は、並みよりもずっとせまい寸法——後巾 7 寸、前巾 5 寸、衿巾おくみ 3 寸ぐらいに縫いあげるのが粋な仕立てのコツだそう。ちょっと肥り気味の人でも、せいぜい五分ずつ広くする——という意味で、語呂がいいからすぐおぼえた。
8. 夏景色にした居間に母と向いあって、新しい浴衣地をひろげ、ザクリザクリと裁ち鉄を入れてゆくのは、その頃の私の楽しみの一つであったように思う。
9. ちかごろの若い男の人たちは、素肌に、じかにジャケットをはおり、胸に糸のような金グサリをのぞかせている。それと似たようなカッコよさが、街をゆく男の浴衣姿にはあった。

10. そして、そんな姿を振り返って、下町の娘たちは、
「ちょっと、^{ようす}様子がいいわね」
などと、ささやき合ったものである。

P.123 ~ 125

[コメント]

東京の下町、浅草のちょっと昔の様子がよくわかる私の大好きな女優沢村貞子さんのエッセイ集。
「日本的な美しさ」を「浴衣(ゆかた)」の着方(きかた)の中に見出すことができる。素晴らしい文。

- 2010年7月24日 林 明夫記 -